令和４年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2023

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査の報告である。これらについては令和３年度国庫・県費補助金の交付を受けた。

2．調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。

3．本文の執筆は、新田（１・３・４）、加藤（2）で分担し、編集は新田が行った。図版などの作成は一部で整理作業員の協力を得た。

4．遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。

5．出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。

6．現地調査から本書の作成に至るまで多くの方から御協力、御教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。

株式会社ＩＮＰＥＸ　川口土地改良区　川口武道窪集落　三島郡北部土地改良区　寺泊入軽井集落

寺泊高内集落　寺泊町軽井集落　新潟県長岡地域振興局　武道窪地区ほ場整備準備委員会　石坂圭介

目　　次

１	令和４年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
２	寺泊（平野新）地区試掘確認調査	3
３	上並松遺跡確認調査	10
４	武道窪地区試掘調査	16

第１図　長岡市の位置

写真１　調査風景（上並松遺跡）

１　令和４年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

（１）長岡市の地勢

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、面積は891㎢におよぶ。市の中央部を日本一の長さと流水量を誇る信濃川が縦断し、その両岸に肥沃な沖積平野が広がっている。平野の東西には、東山丘陵と西山丘陵と称される東頸城丘陵がそれぞれ連なっている。東山丘陵の東、栃尾地域の南東方面には、越後山脈に属する標高1,537ｍの守門岳がそびえる一方、市域の北側の寺泊地域では日本海に面して約16㎞の南北に延びる海岸線を持つ。このように長岡市の地形は、山岳地帯から丘陵・平野・海岸部に至り、非常に変化に富んでいる点に特徴がある。その地勢的な要因から、それぞれの地域によって特色ある歴史、文化が育まれてきている。

（２）調査の概要

令和４年度は、遺跡の本発掘調査は２件、試掘・確認調査を３件実施した。このほか、諸開発に伴う立会調査を５件実施した（第１表）。本発掘調査は平成28年度以降１件ずつ実施してきたが、令和２・３年度には実施なしであった。また、昨年度６件だった試掘・確認調査の件数は、今年度は３件と半減した。直近10年間の調査数は毎年10件に満たないものの、横ばい傾向であったが、昨年度から減少傾向に転じた。来年度も今年度と同様３件の調査が予定されている。立会調査件数も令和元年度をピークに減少し続けている。

本年度実施した試掘・確認調査の主な結果について概観したい。県営経営体育成基盤整備事業に伴う寺泊地区での試掘調査では、遺構は検出できなかったものの、周知の埋蔵文化財包蔵地である松割観音畑遺跡と谷地遺跡に近接する調査トレンチで遺物（土師器・須恵器）が出土している。また、天然ガスプラント関係事業に伴う上並松遺跡の確認調査では、竪穴状遺構・土坑・焼土・埋設土器とともに縄文時代中期後葉～後期初頭の土器が出土した。また、昭和42年調査の調査トレンチと思われる掘削跡を把握できたことは予想外の成果であった。なお、遺跡は現状保存されることが決まっている。そして、県営農地環境整備事業に伴う武道窪地区での試掘調査では遺物、遺構の検出は見られず、事業において影響がないことを確認している。

第１表　令和４年度長岡市内遺跡調査一覧（本書掲載の調査はゴシック体で示した）

地域	地区	調査原因	結果など
寺泊	城地免西遺跡	県営ほ場整備	本調査　ピット・溝／土師器・須恵器・木製品・銭貨
	寺泊（平野新）地区	**県営ほ場整備**	**試掘　遺構なし／土師器・須恵器・珠洲焼・銭貨**
長岡	転堂遺跡	市道改良工事	本調査　竪穴住居・土坑／縄文土器・石器・土製品
	長岡城跡（城内町３丁目）	建物解体工事	立会　遺構・遺物なし
	長岡城跡（弓町２丁目）	建物解体工事	立会　遺構・遺物なし
	長岡城跡（台町１丁目）	建物解体工事	立会　遺構・遺物なし
	長岡城跡（呉服町一丁目）	建物解体工事	立会　遺構・遺物なし
栃尾	菅畑前田A遺跡	電柱関連工事	立会　遺構・遺物なし
越路	**上並松遺跡**	**天然ガス関連事業**	**確認　土坑・焼土・埋設土器／縄文土器・石器・土製品**
川口	**武道窪地区**	**県営ほ場整備**	**確認　遺構・遺物なし**

第２図　令和４年度調査位置図（1/250,000）

２　寺泊（平野新）地区試掘確認調査

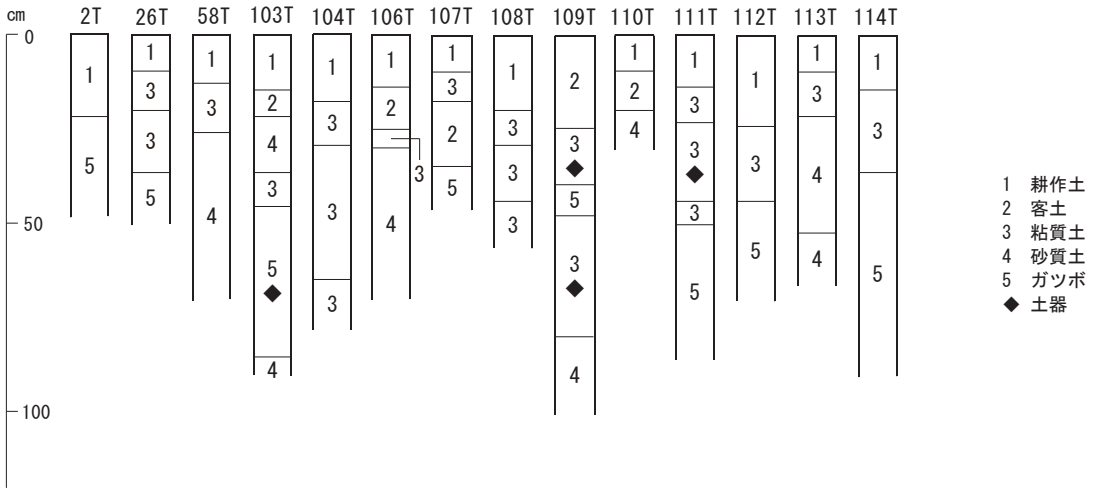
調 査 地	長岡市寺泊高内・町軽井・入軽井地内	調査面積	596㎡（対象面積432,000㎡）
調査期間	令和４年10月３日～10月25日	調査担当	加藤　由美子

調査に至る経緯　平成29年１月、新潟県長岡地域振興局農林振興部農村計画課（以下、県振興局）から長岡市教育委員会（以下、市教委）に、長岡市寺泊町軽井ほか地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教委は、同地域には周知の遺跡が複数存在し未周知の遺跡の存在も考えられるため、開発に際しては事業着手前に埋蔵文化財の試掘調査が必要である旨を県振興局に回答した。令和元年７月、県振興局は県営平野新地区区画整理（経営体育成基盤整備）事業の対象地について、市教委に試掘確認調査を依頼した。これに対し市教委は、平野新地区は面積が広大であることから複数年で調査を行う計画を立て、県振興局もこれに同意した。調査は耕作に支障がない秋の稲刈り後に実施することとなり、調査３年目の令和４年度は高内・町軽井・入軽井地内で調査を行った。

調査地の概要　平野新地区は長岡市西部の寺泊地域に所在する（写真２・第３図）。当該地は燕市との市境に当たり、今回の事業対象地には長岡市寺泊の敦ヶ曽根・高内・万善寺・町軽井・入軽井・田尻、燕市の五千石・大川津（興野）の地籍がある。そのため試掘確認調査も長岡市・燕市両市が分担して実施した。平野新地区は越後平野の最南端部に位置し、当該地の東側では信濃川が北へ大きくカーブする。集落は東頸城丘陵（東側丘陵）の裾部や信濃川の自然堤防上に形成され、周囲の平野部が耕作地として利用されている。ここは古くから信濃川の洪水常襲地帯で水はけの悪い地勢であるため、周辺は泥炭層が一定の厚さで堆積する軟弱地盤であることが多い。

写真２　調査地全景

第３図　調査位置図（1/75,000）



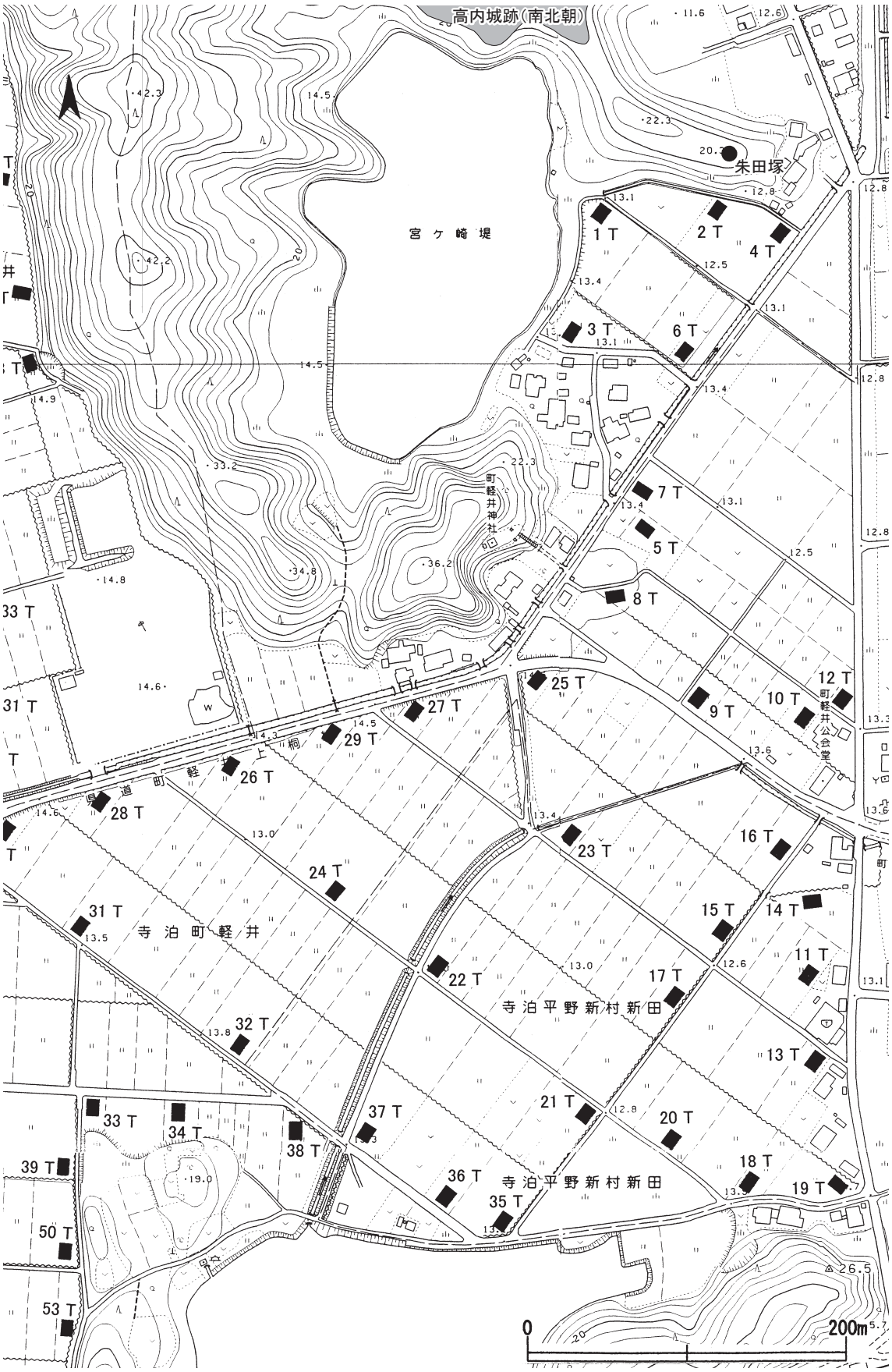
第４図　土層柱状図（1/20）

調査の結果　事前に県振興局から提示された事業計画案では、当事業地内では削平を伴う田面調整が予定されていなかったため、試掘確認調査でも排水路・パイプライン・揚水機場が予定される箇所にのみトレンチを設定し、水路を伴わない面工事のみの範囲は調査の対象から外した。調査対象地内に1.6m ×2.5mの試掘トレンチを計149か所設定した（第５～10図）。調査地内の土層は大きく２つのタイプに分けられる（第４図）。砂質土を中心とした比較的安定した地盤が確認できるエリアと、ガツボ（湿地由来の腐食土）層を挟む軟弱な地盤のエリアで、数としては後者が多い。また町軽井地内では深田を解消するために昭和期に行われた大規模な客土の痕跡が確認された。

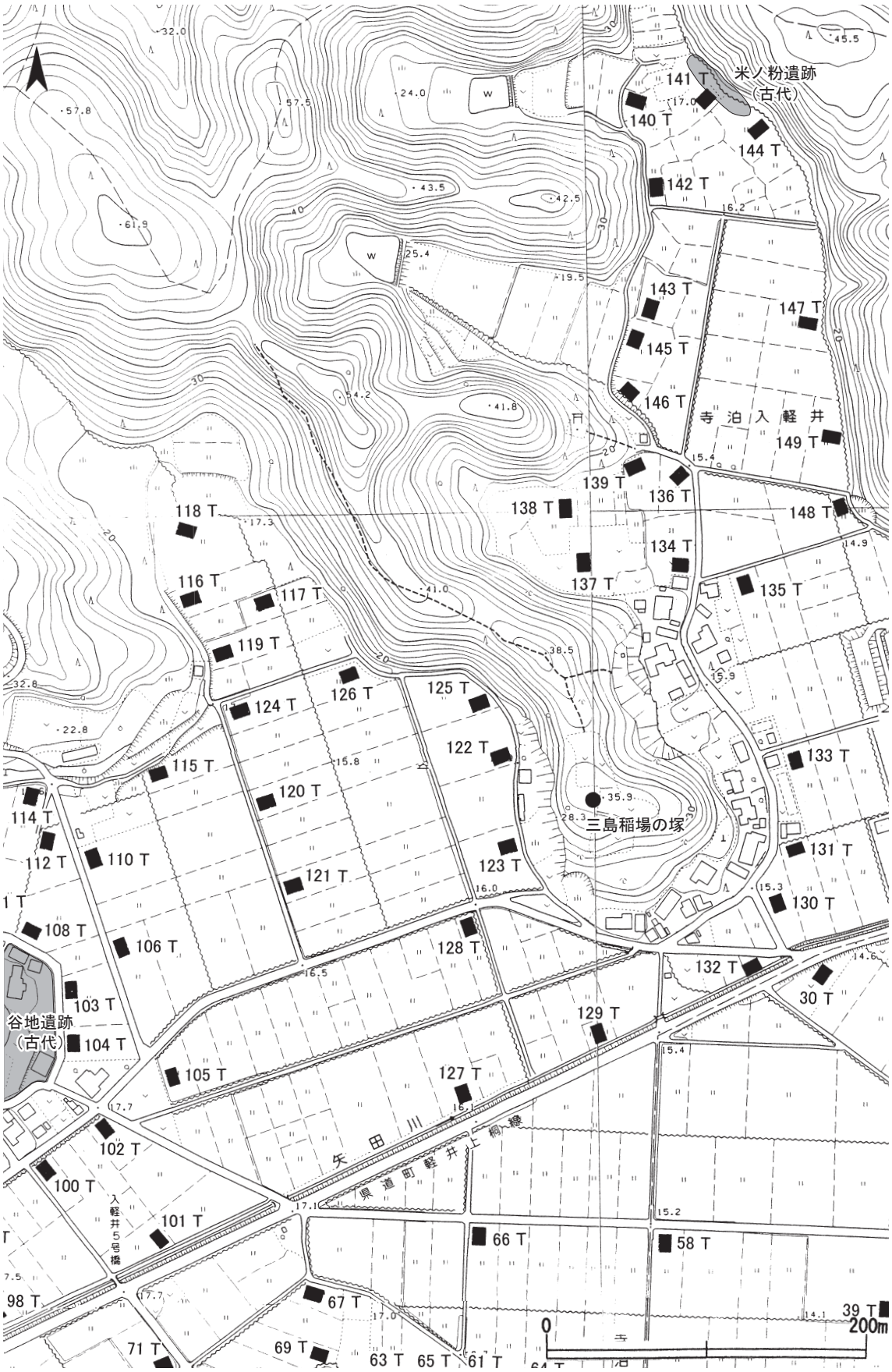
調査の結果、遺構は確認できなかった。遺物は周知の埋蔵文化財包蔵地である松割観音畑遺跡（長岡市№1030）と谷地遺跡（長岡市№1031）に近接する103・105・109・111Ｔで土師器・須恵器が出土した。出土状況からして遺跡本体が立地する丘陵上からの流れ込みと考えられる。また、７・52・62・105・132Ｔでも微量の土師器、珠洲焼、江戸時代の銭貨が出土したが、遺跡と認定できるものではなかった。今回の試掘確認調査では、調査地のすぐ南の丘陵上にある古墳時代前期の大久保古墳群の母集落が発見されるかと期待したが、そのような時期の遺物は１点も出土しなかった。今後の取扱いとしては、松割観音畑遺跡と谷地遺跡に近接する範囲は工事計画に照らし、場合によっては追加の確認調査が必要と考えられる。その他の場所については、工事の実施にあたって特段の支障はないと判断した。

写真３　調査風景（掘削）

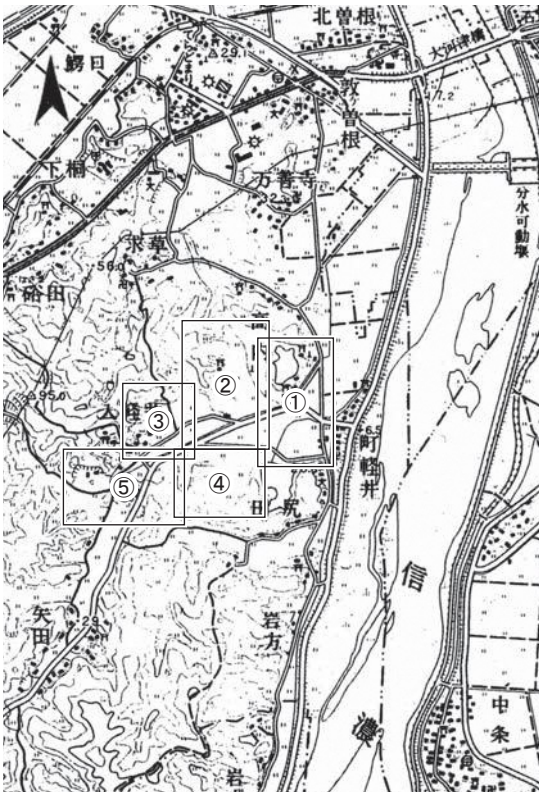
写真４　調査風景（埋戻し）



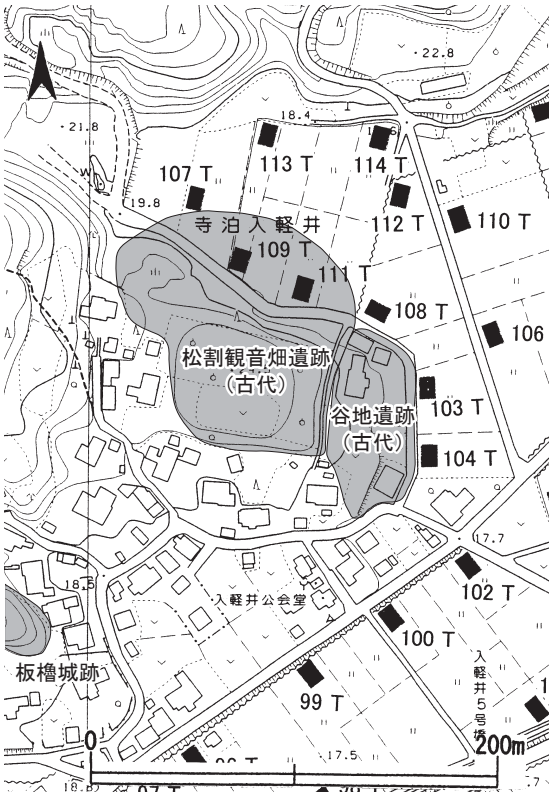
第５図　トレンチ配置図①（1/3,350）



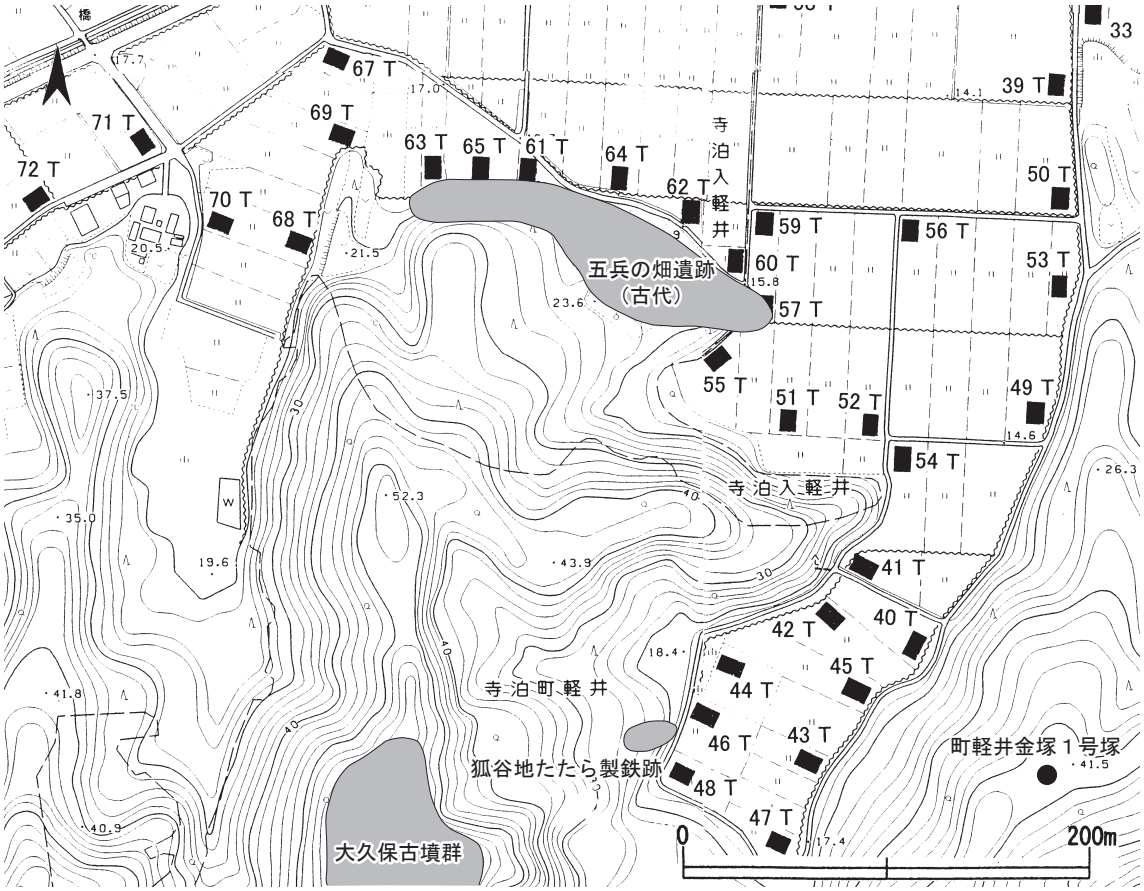
第６図　トレンチ配置図②（1/3,350）



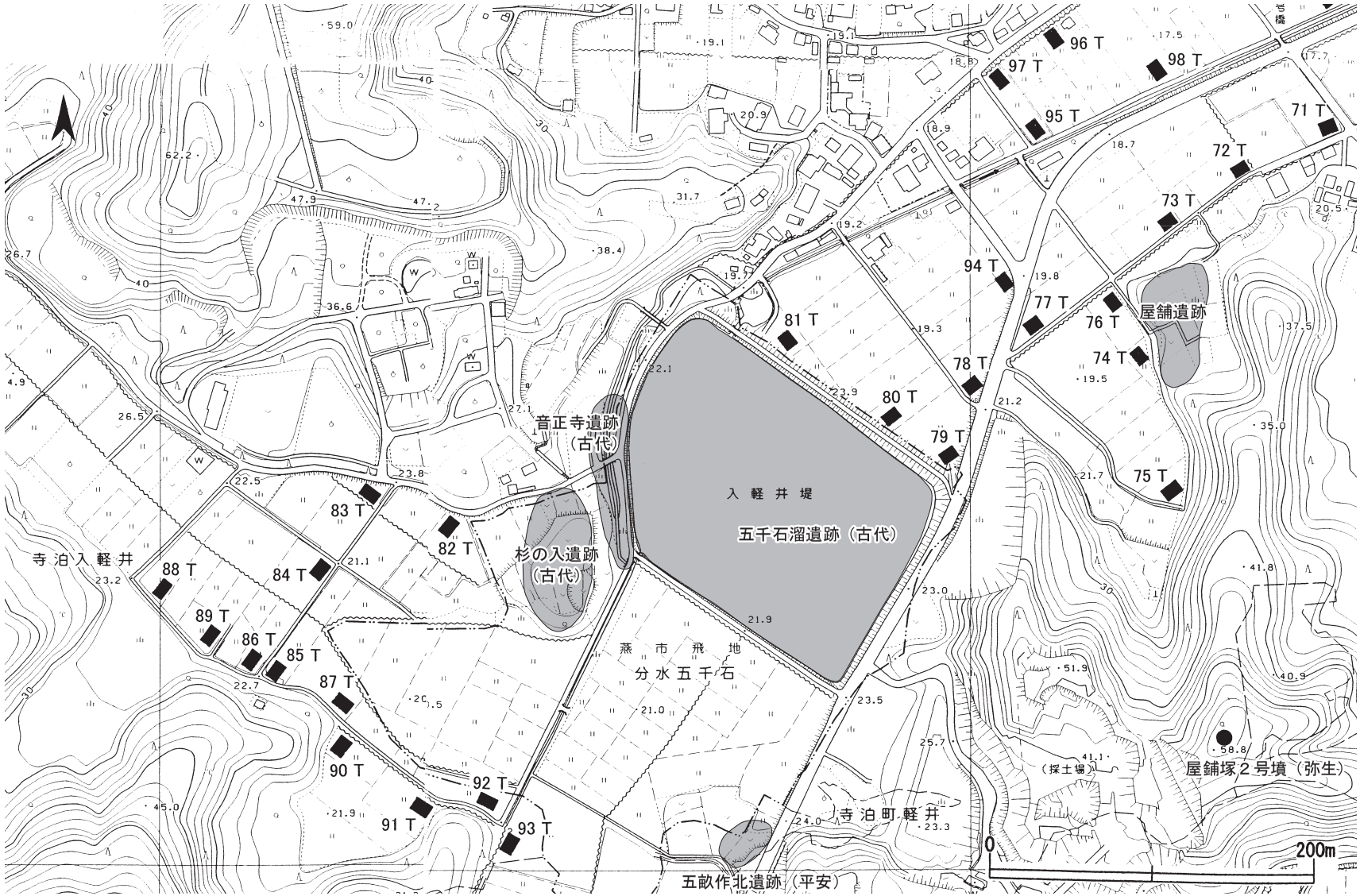
第７図　トレンチ配置図（全体）



第８図　トレンチ配置図③（1/3,350）



第９図　トレンチ配置図④（1/3,350）



第10図　トレンチ配置図⑤（1/3,350）

写真５　２トレンチ

写真６　26トレンチ

写真７　58トレンチ

写真８　103トレンチ

写真９　109トレンチ

写真10　111トレンチ

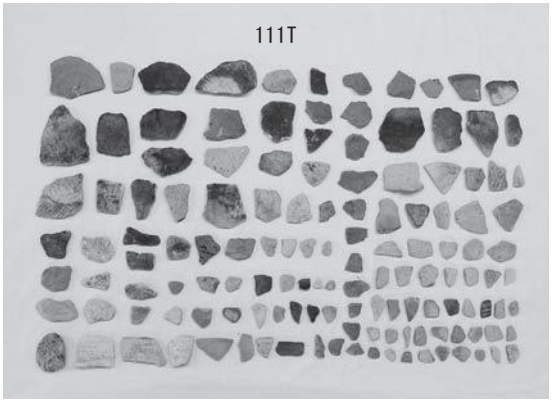


写真11　出土遺物（1）

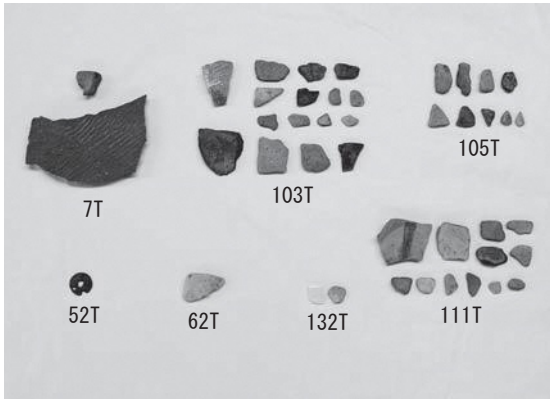


写真12　出土遺物（2）

３　上並松遺跡確認調査

調 査 地	長岡市朝日字上ノ山234-1ほか	調査面積	58.95㎡（対象面積3,770㎡）
調査期間	令和５年４月21日～22日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯　上並松遺跡における国際石油開発株式会社帝石（現・INPEX）越路原プラント用地の新規造成工事に係る埋蔵文化財包蔵地の取り扱い協議は、平成29年９月まで遡る。協議を重ねた結果、遺跡西側（エリアⅠ）については、おおむね権ヶ沢の埋立によって造成を行い、段丘上の遺跡本体（エリアⅡ）については現況の畑地を耐圧シート・砂利敷で整備することにより、遺跡を現状保存することとなった。このうちエリアⅠについては、令和元年度、土留擁壁等による掘削箇所を対象に立合調査を実施している〔長岡市教委2020〕。

今回報告するのはエリアⅡにおける確認調査である。このエリアについては令和３年４月から再協議を行い、実施設計の精査等を行った。そして、従前からの協議とおり現況保存が図られるものの、遺跡の遺存状況を確認するため、施工前に調査を実施することとした。

調査地の概要　上並松遺跡は信濃川左岸に形成された越路原Ⅰ段丘の北縁部に位置する。古くから遺物採集地として知られており、『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告第７輯』〔齋藤1927〕にも「並松」の名が確認される。越路原総合開発事業に伴い、昭和42年８月、越路町教育委員会による発掘調査が実施され、土坑や焼土等の遺構と共に、縄文時代前期末葉～後期中葉、弥生時代後期の遺物が出土している〔中村ほか1970, 越路町1998〕。この昭和42年調査の第１・５溝を含む遺跡東半は開発事業による水田化で消滅したが、第２～４溝を含む遺跡西半は畑地として残されて遺跡が保存されたと推測され、現況で遺物が表面採集できる状態にあった。

調査の方法　事業地はこの遺跡西半部に該当する。今回の調査では２本のトレンチを設定し、昭和42年調査トレンチとの混同を避けるため、南側を11Ｔ（1.5m ×32.0m）、北側を12Ｔ（1.5m ×7.2m）と呼称した（第11図）。11Ｔについては南端から北へ２ｍごとにＡ・Ｂ・Ｃ・・・とアルファベットでグリッド名を振った。耕作土はバックホウで除去し、その後人力による作業に切り替えたが、この調査は遺跡の遺存状況の確認が目的であるため、遺構掘削は最小限に留めた（第12図）。

調査の結果　11Ｔでは包含層は確認できず、耕作土（層厚約20㎝）直下は黄褐色風化火山灰土層（地山層）であった。これを遺構確認面とし竪穴状土坑をはじめとする遺構を検出した。そして、主として遺構埋土上面から、縄文時代中期前葉～後期前葉にかけての縄文土器が多数出土している。また、11Ｔ南側では旧調査トレンチ跡と思われる掘削痕を確認した。これが長さ10ｍを測ることから、昭和42年調査の第四溝と推定される。一方、12Ｔでは埋設土器１基を中心に、縄文土器片が出土した。調査区全体ではコンテナ５箱分の遺物が出土している。

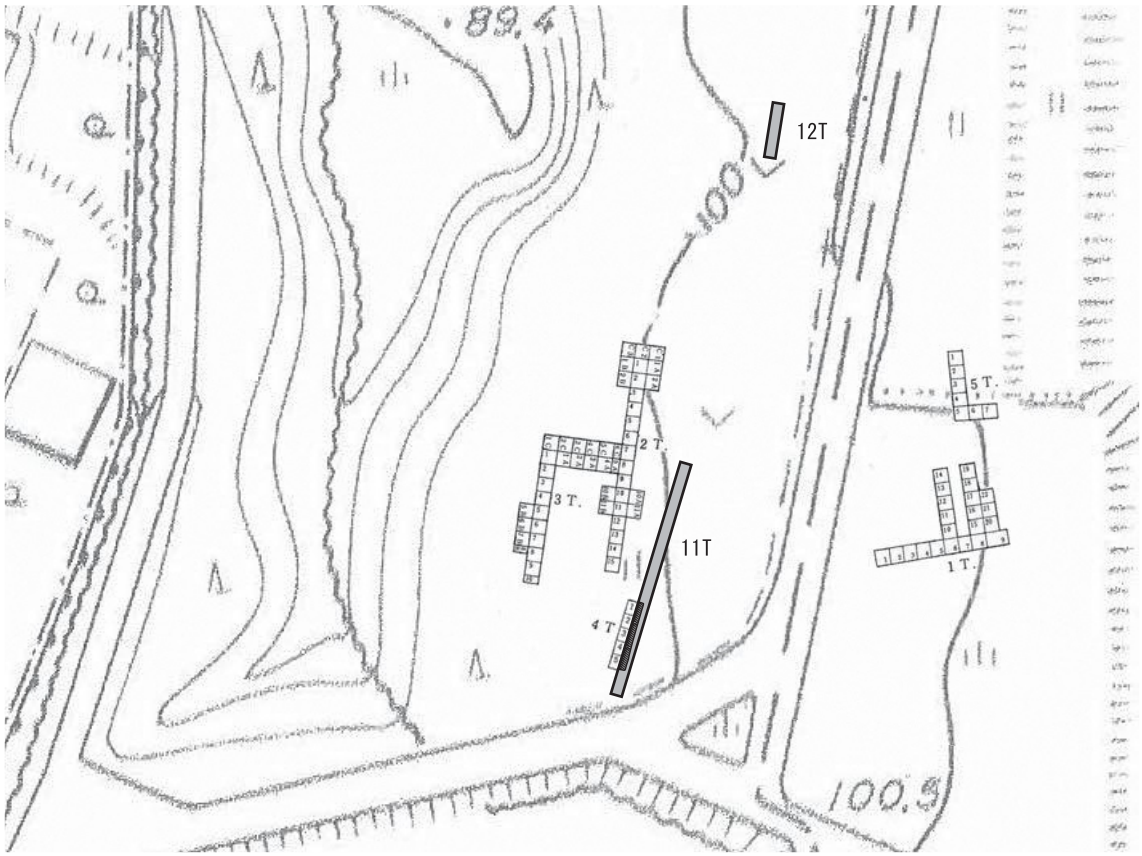
11Ｔでは竪穴状土坑２基のほか、土坑・ピット・焼土を確認した。このうち、おそらく円形プランを呈するであろう大形の土坑については竪穴状土坑として分類した。竪穴状土坑１はＦ～Ｈグリッドにかけて広がっており、調査区東壁に沿ってサブトレンチ１を設定して調査した結果、北側と南側の両端で明瞭な立ち上がりを確認した。遺構埋土は①～③層に分層される。埋土の掘削をサブトレンチに限定したため、柱穴・炉、そして明確な床面の検出には至らなかったが、竪穴住居跡である可能性が高い。主な出土遺物は第13図１～24である。1～4、22・23は栃倉式、5～17は城之腰式〔石坂2012〕に分類される。後者には多賀屋敷類型（5～9）、城之腰類型（10･11）、内屈する蓋受け状口縁部（12）、蓋形土器（13）、条線文土器（14

～17）が含まれる。②層から多賀屋敷類型の土器（5・7・15）がまとまって出土していることから、本遺構は縄文時代後期初頭に帰属する可能性がある。

竪穴状土坑２はＪ～Ｍグリッドにかけて広がっており、周辺には４基の焼土や、重複する複数の土坑などを確認した。竪穴状土坑２の調査については遺構を保存するため、サブトレンチを入れず、遺構プランの確認と、その際に出土した遺物の取り上げに留めたが、竪穴状土坑１と同様、住居跡の可能性があろう。主な出土遺物は第14図25～36である。25は五丁歩式〔長澤2018〕、26～28は栃倉式、31・32は後期初頭の口縁部資料である。33～36はＪグリッド出土土器。うち33～35は栃倉式､36はひんご１式〔鈴木2018〕である。この他、表採資料には有孔鍔付土器（37）、敷物圧痕のある底部片（38）、土製円盤（39～41）、打製石斧（42）、糸掛けが両極技法で作製された小形の石錘（43）、磨石類（44）が含まれる。

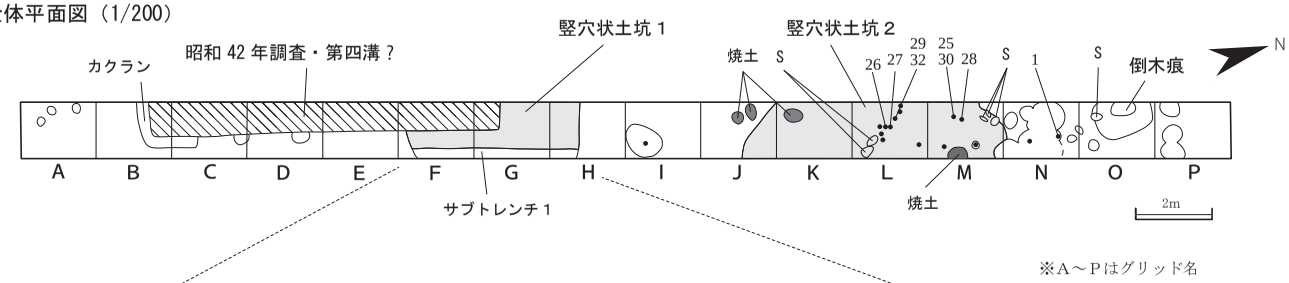
12Ｔでは後期初頭の土器がまとまっている状況であった（第15図）。45は埋設土器で、正位の状態で出土した。曲線的な条線文が施されている。土器埋土には46のほか､三十稲場類型の胴部小片等が含まれいた。47は45のすぐそばから出土した大形の壺形土器の口縁部資料。三十稲場類型と同じような構成を持つ。48～50は刺突文を施した三十稲場類型の胴部片。51は城之腰類型、52は蓋形土器、53は条線文地文の土器、54は縄文地文の土器である。

まとめ　以上のように、事業地には遺跡が遺存していることを確認した。今回の事業では遺跡は現状保存されたが、将来、掘削を伴う開発行為が行われる際には本発掘調査が必須となる。また、検出遺構や出土遺物の内容は昭和42年調査に沿うものの、小片であるが五丁歩式土器が出土したこと、より古手の栃倉式土器と思われる資料も確認できた点で、上並松遺跡に関する新しい見地を提示することができたものと考えられる。

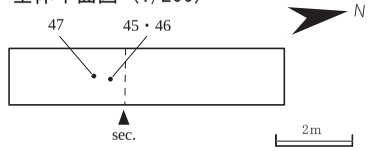


第11図　調査地位置図（1/1,000）　＊昭和42年調査トレンチ(1～4T)の位置は推定

11T 全体平面図（1/200）



12T　全体平面図（1/200）



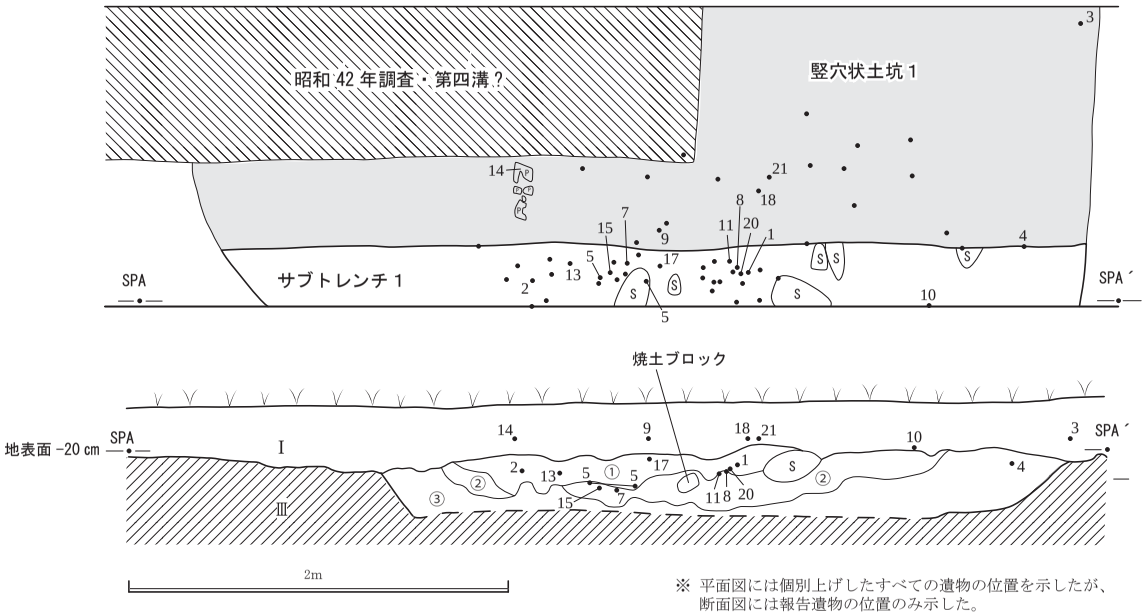
(1/40)

基本層序

Ⅰ層：表土層・耕作土層　しまり２　粘性２
　　粒径２～３㎜のローム粒子少量含む

Ⅱ層：茶褐色土層　しまり３　粘性２
　　遺物包含層

Ⅲ層：黄褐色風化火山灰土層　しまり５　粘性３



※ 平面図には個別上げしたすべての遺物の位置を示したが、
断面図には報告遺物の位置のみ示した。

11Ｔ 竪穴状土坑１付近 平面図・断面図 （1/40）

竪穴状土坑１（南から）

竪穴状土坑２（南から）

竪穴状土坑１（サブトレンチ１）　土層説明

①層：黒褐色シルト（ 7.5YR4/1）　しまり４　粘性４
　　粒径２～４㎜の炭化物粒を少量、粒径２～５㎜の焼土粒を少量含む。

②層：にぶい赤褐色シルト（5YR5/3）　しまり４　粘性３
　　粒径２～130㎜の焼土粒～焼土ブロックを多量に含む。

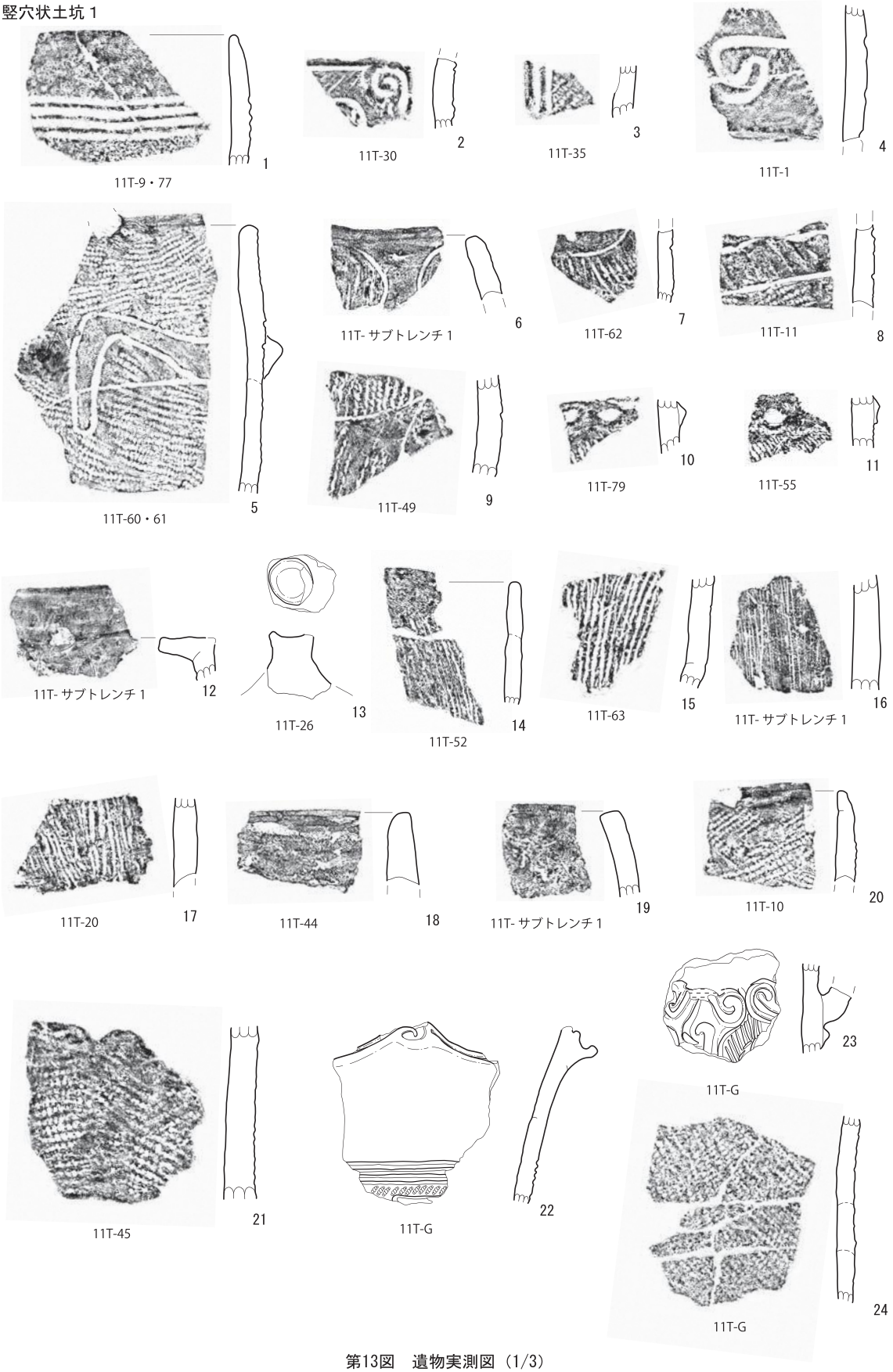
③層：にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）　しまり５　粘性３
　　粒径２～３㎜の炭化物粒を少量、粒径２～３㎜の焼土粒を少量、
　　粒径４㎜のローム粒子微量含む。

※　粘性は１＝弱い→5＝強い、しまりは 1＝疎→5＝蜜の各５段階で表記

第12図　調査区平面図・遺物分布図・層序図

11Ｔ

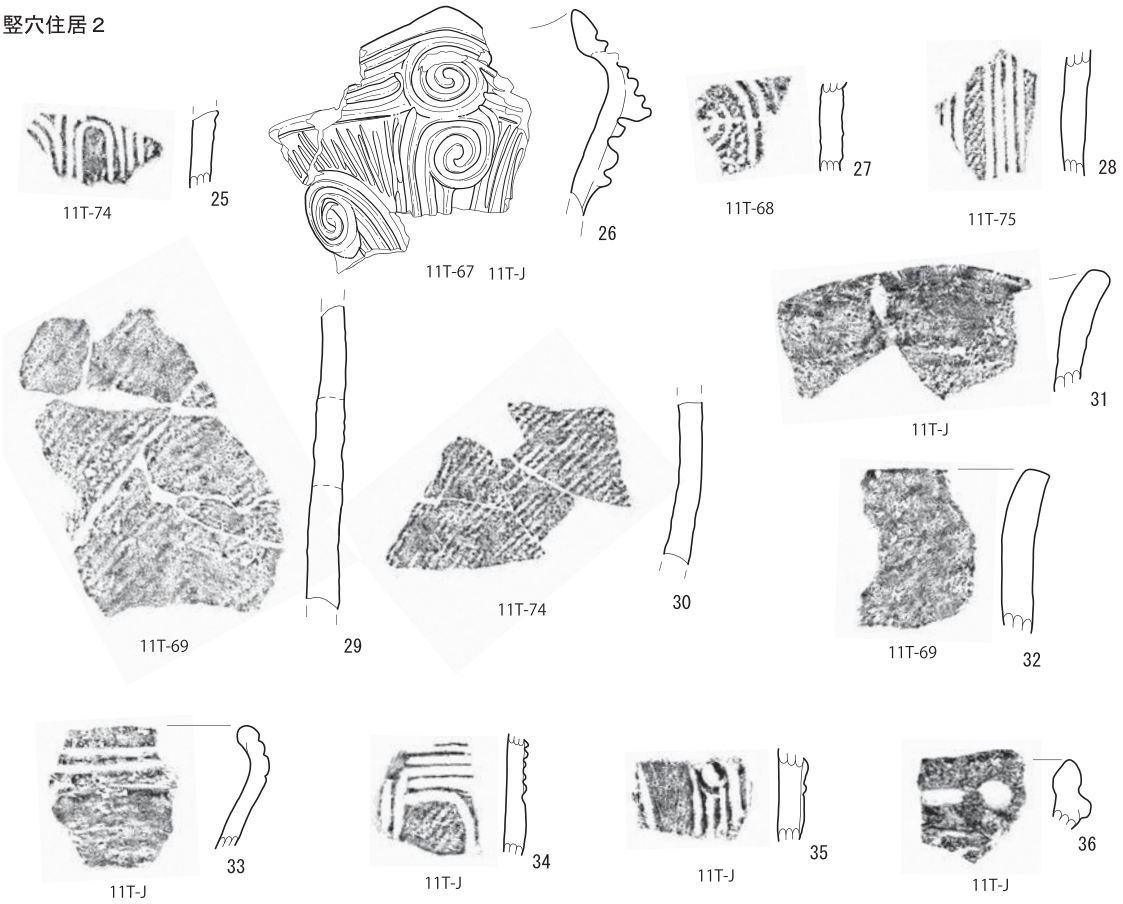
竪穴状土坑１



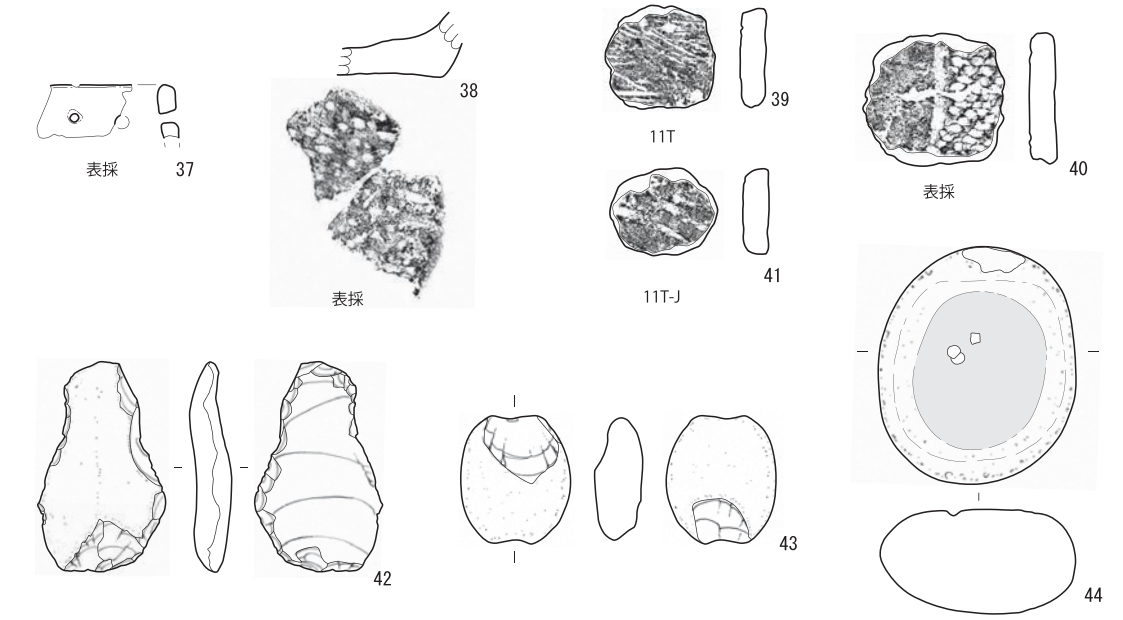
第13図　遺物実測図（1/3）

11T

竪穴住居２

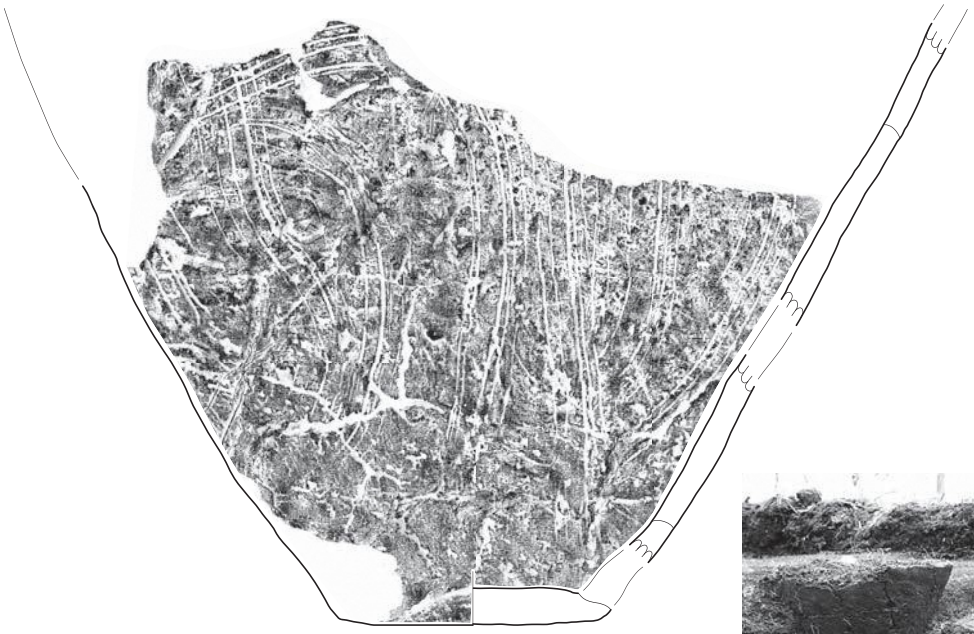


表採資料



第14図　遺物実測図（1/3）

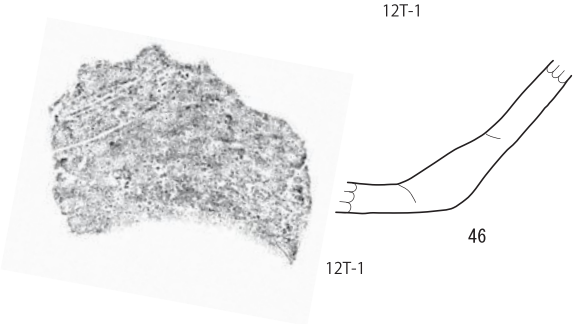
12T



45

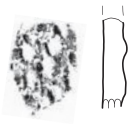
12T-1

土器出土状況（45・47）



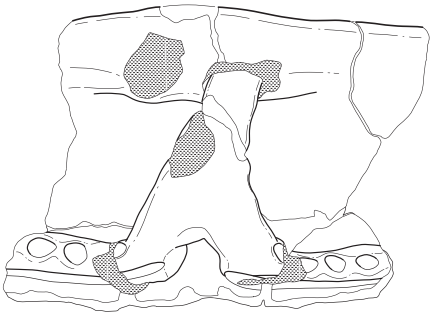
46

12T-1



48

12T



12T-3

47

49

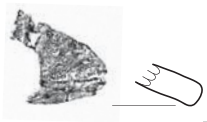
12T

12T

50

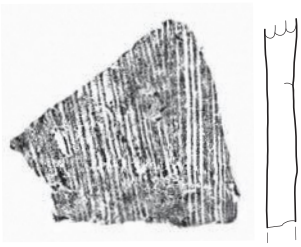
51

12T



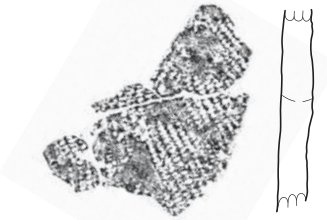
52

12T



53

12T-2



54

12T-1

第15図　遺物実測図（1/3）

4　武道窪地区試掘調査

調 査 地	長岡市川口武道窪	調査面積	408.4㎡（対象面積157,000㎡）
調査期間	令和４年10月25日～11月２日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯　令和３年８月26日、長岡地域振興局農林整備部（以下、事業者）から、長岡市川口武道窪地区における県営農地環境整備事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。事業地には周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていないが、原塚群１～７号（遺跡番号1370～1376）に近接し、また未周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性があるため、試掘調査を実施して、事業計画に反映させることとした。

第16図　調査区位置図（1/50,000）

調査地の概要　調査地には信濃川右岸に形成された丘陵地であり、河岸段丘の形成もみられる（第16図）。これらは幾筋もの沢によって開析されており、旧状は複雑な地形であったと推測される。現地での聞き取りでは、主に桑畑・蕎麦畑が広がっていたとされ、昭和40年代に実施されたほ場整備によって地形が大きく改変された。その後、水田の一部は養鯉池となっている。

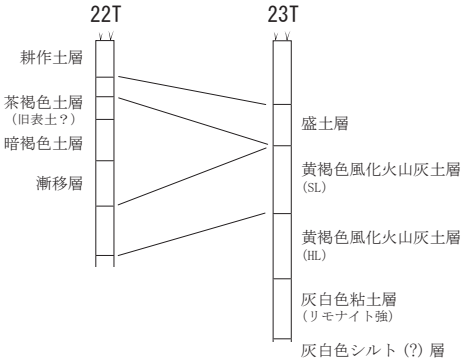
調査の方法　調査はバックホウと人力とで慎重に掘削して進めた。事前の土壌調査によって、事業地には軟弱地盤が広がっていることが想定され、加えて次年度以降作付けが予定されているため、埋戻方法について地元及び事業者と協議を重ね、耕作機械の沈下防止のため、埋土に合板を埋設することとした。掘削に際しては、トレンチを合板の規格に合うように設定し、地表面から深度30センチメートルで段を作ってから下層を掘り進めた。これは埋め戻しの際に、このレベルに合板を埋設して犬走にも合板を支持させることで、沈下防止の効果を高めることを意図した措置である（写真13・14）。

調査の結果　68箇所のトレンチ調査を実施したが、遺構・遺物を検出することはできなかった（第17・18・写真15）。いくつかの調査トレンチで溝状や土坑状の掘り込みを検出したが、これに伴う遺物は現代のものを含め全く出土せず、帰属時期を判断できない状況であるものの、これらは埋土の状況から、主に現行のほ場整備以前に行われていた畑作に伴うものと判断される。したがって、当該地に遺跡が包蔵されている可能性は極めて低く、本事業に対する更なる措置は必要ないと判断した。

写真13　調査状況その１（7T）

写真14　調査状況その２（22T）

第17図　調査トレンチ配置図（1:7,000）



第18図　土層柱状図（1/10）

写真15　土層堆積状況（22T　南から）

参考文献

石坂圭介

2012　「新潟県における縄文時代中期後葉から後期初頭の土器様相」佐藤雅一・佐藤信之・今井哲也編『津南シンポジウムⅧ予稿集　三十稲場式文化の世界―4.3Ka イベントに関する考古学現象②』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

越路町

1998　『越路町史』資料編１　原始・古代・中世　越路町

齋藤秀平

1937　『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第７輯　新潟県

鈴木徳雄

2018　「縄紋後期前半における土器型式の存立構造」『地域考古学』３号　地域考古学研究会

田中耕作・古澤妥史

2019　「第５項　後期」『新潟県の考古学Ⅲ』　新潟県考古学会

寺泊町

1992　『寺泊町史』通史編上巻　寺泊町

長岡市教育委員会

2020　『令和元年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』　長岡市教育委員会

2021　『令和２年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』　長岡市教育委員会

2022　『令和３年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』　長岡市教育委員会

長澤展生

2018　「火焔型・王冠型土器出現前夜の様相―五丁歩式土器設定の試み―」佐藤雅一・佐藤信之・今井哲也編『「馬高式土器の成立・展開・終焉」予稿集』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

中村孝三郎

1966　『先史時代と長岡の遺跡』　長岡市立科学博物館

中村孝三郎・稲岡嘉彰・金子拓男・神林昭一・深井義春

1970　『越路原総合調査報告書　朝日百塚　並松遺跡』越路町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	れいわよねんどながおかしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	令和４年度長岡市内遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	新田康則・加藤由美子
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940－0084　新潟県長岡市幸町２丁目１番１号
発行年月日	2023年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつわりかんのんはたけいせき 松割観音畑遺跡	にいがたけんながおかしてらどまりいりかるいあざまつわり 新潟県長岡市寺泊入軽井字松割1466ほか	152021	1030	373548 1384843	20221003 20221025	12.0㎡	試掘調査
やちいせき 谷地遺跡	にいがたけんながおかしてらどまりいりかるいあざやち 新潟県長岡市寺泊入軽井字谷地1788ほか	152021	1031	373547 1384846	20221003 20221025	4.0㎡	試掘調査
かみなまついせき 上並松遺跡	にいがたけんながおかしあさひあざかみのやま 新潟県長岡市朝日字上ノ山234-1ほか	152021	406	372717 1384615	20220420 20220421	59.0㎡	確認調査

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
まつわりかんのんはたけいせき 松割観音畑遺跡	遺物包含地	古代	なし	土師器・須恵器	なし
やちいせき 谷地遺跡	遺物包含地	古代	なし	土師器・須恵器	なし
かみなまついせき 上並松遺跡	遺物包含地	縄文	土坑	縄文土器・石器・土製品	なし

令和４年度　長岡市内遺跡発掘調査報告書
令和５（2023）年３月 31 日　印刷
令和５（2023）年３月 31 日　発行
発　行　　新潟県長岡市教育委員会
印　刷　　あかつき印刷株式会社